

# No. 980

## 巨人先勝

—日本シリーズ—

巨人の八連覇か、阪急が五度目の意地を見せるか、プロ野球の日本一を決める1972年度の日本シリーズ第一戦は10月21日、午後1時から後楽園球場で行なわれました。美濃部都知事の始球式でプレーボール。

一回阪急は巨人の先発堀内から住友がホームランで先行、その裏巨人は王のタイムリーで同点、更に末次が2点ホームランを奪い逆点、試合の主導権を握ります。一方阪急も4回ヒットで出塁したソーレルを一塁において長池がレフトスタンドへホームラン。試合はふり出しに戻りました。しかし同点もつかの間、巨人は、この日の当り屋、末次が阪急の先発山田から二打席連続ホームランで再びリードを奪います。

結局、堀内の好投でそのまま逃げきり、阪急は昨年以來4連敗、巨人は続く第2戦にも勝ち、八連覇へ大きく近づきました。

## 消えゆく伝統芸能

隅田川の河口にあって、今も、江戸の情緒を残す下町。そこに、今、無形文化財として残された伝統芸能がある。「深川力持」と「角のり」だ。

深川・木場の歴史は、江戸初期に逆のほる。江戸城普請、江戸の町づくりの重要な木材が、水利に恵まれたこの地に運ばれ、貯木場として開かれた。江戸の発展に伴い、木場も繁栄した。木場に「木やり」が開かれ、役師が角材を自由にあやつっていた。「角のり」は役師の遊びとして始まった。

門前仲町、富岡八幡宮にその碑は残る。隅田川沿いに並んでいた米倉に働く倉方が競いあった力くらへの碑もまたここに残っている。戦前まで八幡宮の境内で祭りを盛りあげる名物でもあった。体を張って生きた倉方の心意気が今に伝わる「深川力持」。60kgもある米俵を軽々とあしらいさしあげる。そこに倉方として生きる自慢と誇りがあったのだろう。\*宝の入船、と呼ばれる技は、一屯の下敷になる荒技だ。小谷原一雄さん(45才)。できるのはこの人だけだ。今年限りになるかも知れないという。

「角のり」は「地のり」「三宝のり」「かごもどり」「はしごのり」など、数々の芸を生んだ。しかし、今、後継者が見つからず、無形文化財としての保存はむずかしい。三枝晴雄さん(62才)、明治、大正、昭和と木場に生きた役師だ。芸も今年限りになるという。

深川木場は地盤沈下などで、引き船もくぐれない。長い歴史に終止符をうち、昭和50年までに14号埋立地に移転する事になった。下町の風土が生み出した伝統芸能も、歴史の移り変わりの中で、今消えようとしている。明治からのこの地を縦横に走りつづけた都電と共に。